越原春子
(1885～1959)

自由に羽ばたくために

行動や職業を制限され、女性が自由に生きられなかった時代。
少女は、女性がかがやける世界を思いえがいた。
その実現のために、生涯をかけて取り組んだこととは――。

男に生まれていたら

岐阜の山あいの木々を、しとしとと雨がぬらしていた。春とはいえ、指先が冷たくなる寒さだ。

そんな中、とある家屋の玄関先にいくつかの人かげがあった。師範学校教習所の入学式に旅立つ十四才のむすめと、それに付きそう母親を、父親といとこが見送っていたのである。

「くれぐれも体に気をつけて。」

こう声をかけられて、むすめは、みなの方にまっすぐと体を向けた。

「行ってまいります。」

深々とおじぎをして、ていねいに別れを告げた。そして、親子は歩きだした。

家が見えなくなったころ、ふと母が立ち止まり、口を開いた。

「お父さんは、おまえが教習所に行くことを、心からは許してくださっていないのだろうね。」

「さあ……、どうでしょう。」

むすめは、思わず母の顔を見た。母は不安げな表情をしていた。

「さあ！　急ぎましょう、お母さん。」

むすめが不安をふりはらうかのように明るい調子で言うと、二人は再び前を向いて、山道を歩きだした。

むすめの名は、越原春子。一八八五年（明治十八年）、岐阜県加茂郡東白川村に生まれた。越原家は、江戸時代に代々庄屋を務めていた家がらである。明治時代になると、庄屋などの身分制度がなくなり、父は小学校の学務委員をしていた。

父は、教育に関わる仕事に熱心だった。そんな父の姿を見て育ち、学校では恩師にめぐまれた。

※庄屋＝江戸時代の村の長。
※学務委員＝公立学校の教育に関わる事務を行う人。

（わたし、教員になりたい。）

春子は、強くそう思うようになった。春子は、高等小学校を卒業すると、岩村町（今の岐阜県恵那郡岩村町）にある岐阜県師範学校教習所裁縫講習科を受験させてほしいと、父にたのんだ。

「一人むすめのおまえには、江戸時代二百六十年にわたって庄屋を務めたこの家を、しっかりと守ってもらわんといかん。」

父の反対は強かったが、春子も負けなかった。

「たのみます。たのみます。」

父の顔を見るたびに、何度も何度もくり返しお願いした。父はとうとう根負けし、ある日、すっと春子の願いを受け入れた。

春子は、勉強にはげみ、みごと合格した。合格証が届いた日の父の複雑な顔を、春子はずっと忘れられなかった。

（わたしが男だったら、お父さんはきっと気持ちよく送り出してくださっただろう。）

春子の胸に、さみしいような、つらいような、なんとも言えない思いがよぎった。

春子の決意

一年後に学校を卒業した春子は、十五才でとなり村にある小学校の教員になり、裁縫を教えた。学校での仕事は楽しく、やりがいがあった。

やがて、父が厳しい態度に出た。

「おまえの望みはかなえた。もういいだろう。今度は、おまえが親の言うことをきく番だ。」

春子は、小学校に一年勤めただけで退職し、家事の手伝いをすることになった。しかし、教員への思いをあきらめることはできなかった。

春子は、家で養蚕※などの手伝いをするかたわら、村の人からたのまれた縫い物をしてこづかいをかせいだ。そのお金でたくさんの本や新聞を買って、すみからすみまで読んだ。さらに、今でいう通信教育を受け、自分一人で学び続けた。

そんなある日、いとこの内木玉枝から手紙が届いた。名古屋で女学校を創るから、手伝ってほしいとのことだった。春子は、わくわくした気持ちで名古屋に出た。十九才の時であった。

久々に会った玉枝のきりりとした上品さにおどろき、春子はあこがれの思いをつのらせた。都会で生き生きと教育の仕事をする姿を見て、春子は強く決心した。

（わたしも、名古屋で教育の道に生きよう。）

そのためにも、まずは父の許しが必要だと春子は考えた。心の底からわきあがってくる教育への

※養蚕＝カイコを育てて，そのまゆから生糸を生産すること。

情熱を手紙に深く刻みこむようにしたため、父に送った。

「そんな勝手なこと、許せるはずない。」

手紙を受け取った父は、初め、とまどった。しかし、その手紙からなみなみならぬ覚悟を感じ、とうとう春子の生き方を許した。

春子は、父に感謝の思いをいだきながら、新しく学校を創るという玉枝を手伝った。玉枝は、春子の協力を得て、一九〇五年（明治三十八年）に中京裁縫女学校を開校させた。春子は、そこの高等師範科で一年間学んだあと、教員として玉枝を助け、学校の事務仕事もこなした。そして、玉枝の弟である和と結婚して、夢中で働いているうちに、八年もの時が過ぎた。

そのころから、春子は自分の学校を創りたいと、しきりに思うようになった。

（女性が男性と同じように生きるためには、もっと知識と教養が必要となってくるはず。そのためには、女性のための学校を創らないと。）

春子は、夫とともに血のにじむような努力を重ね、一九一五年（大正四年）、名古屋市東区に名古屋女学校（今の名古屋女子大学中学校・高等学校）を開校した。

服装への思い

夢にまで見た自分の学校ではあったが、生徒はなかなか集まらなかった。父も、村々の小学校を回って、生徒の募集をするなど助けてくれた。それは、春子にとって大きな支えとなった。そして、第一回入学式には二十六名の生徒が集まった。

その後も、授業に、生徒募集に、役所へのお願いにと、春子自ら一日中動き回らねばならない生活が続いた。

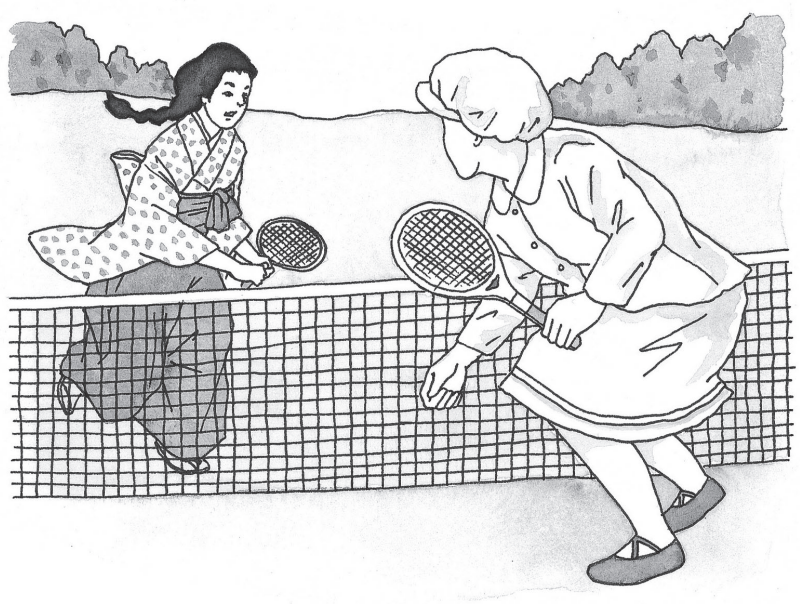
「ひささん、早くして。時間がないわよ。」

生徒が下校すると、さっそく次の仕事である。

しかし、いつも春子といっしょに行動していた教え子の伊東ひさは、出かける支度をするのに、帯をしめるだけでも十五分はかかっていた。

「そんなに時間がかかる帯を使っていないで、わたしの帯みたいに切ってしまいなさいよ。」

春子が考え出した帯は、結びの部分は今までのものと同じ幅で、残りは全部半分に切ってあるので、軽いうえに、早く結ぶことができた。布も少なくてすむので、値段も安くなる。この帯は、のちに中村呉服店（今の名古屋三越）の目にとまり、一九二四年（大正十三年）、「名古屋帯」という名で売りだされるようになった。



当時、女性が家事にかけていた時間は、一日十一時間といわれていた。春子は、女性が少しでも家庭生活を便利にして、できた時間を勉強や自分を高めるために使ってほしいと願っていた。そのためには、「動きやすくて便利な服装」は、欠かせなかった。

この考えは、生徒の服装にも取り入れられ、一九一九年（大正八年）、名古屋で初めて洋装の女学校の通学服を作った。また、運動をする時も着物にはかま姿がふつうだったこの時代に、名古屋女学校の生徒は、女学生※庭球大会において、庭球選手のための洋装の運動服を着て、みんなをおどろかせた。育ちざかりの生徒たちは、のびのびとコートを動き回り、力を存分に発揮した。

春子の、服装にこめた女子教育への思いが、生徒たちをかがやかせていたのである。

※庭球＝テニス。

平等に生きる社会へ

「国家社会のもとになるのは家庭であり、その家庭を健全にするのは婦人です。政治と家庭、政治と婦人を切りはなすことはできません。」

名古屋市栄町の街頭で、三輪自動車の上から道行く人に演説をしている春子の姿があった。

一九四六年（昭和二十一年）、女性に初めて参政権があたえられて、太平洋戦争後第一回の衆議院議員総選挙が行われた。春子は、新しくできる「日本国憲法」の中に、男女平等の考えがしっかりと生かされるのを見届けるために立候補し、みごとに当選した。

日本最初の女性議員三十九人のうちの一人となった六十一才の春子は、新しい憲法を女性の立場から一つ一つ見直していった。そうしてできあがった日本国憲法の第十四条には、「すべて国民は、法の下に平等であつて、性別のために差別されない」と記された。春子は、心から満足した。

次の年、第二回の衆議院議員選挙が実施された。再び立候補してほしいという声もあがったが、春子は二度と政治の場へ出ることはなかった。

「女性が自分の思う道に進んで、力を発揮することのできる憲法ができました。これで、わたしの国会での役目は終わりです。わたしは、初めの志どおり、学校にもどります。」

教育の世界にもどった春子は、学校へ通う時間も惜しみ、校内の住宅で暮らした。そして、一九五九年（昭和三十四年）、窓辺から聞こえる生徒の声に包まれながら、息を引き取った。七十四才であった。

越原記念館の展示風景。中央にあるのは，洋装の通学服。

春子の考えや行動は，当時の世の中では斬新で人々をおどろかせ，影響をあたえました。そんな春子の情熱にふれてみましょう。

理想の女性像

春子が教員になった時代は、女性がよい妻として、かしこい母として家庭を支える「良妻賢母」が理想とされ、女子教育の目標にもなっていました。

春子は、その良妻賢母だけではなく、職業能力をもち、自分をみがき続けるという「新しい女性像」を理想としました。

春子の考案した名古屋帯や通学服、運動服はとても動きやすく、女性がのびのびと活動できるようになりました。そのおかげもあって、陸上競技や庭球（テニス）などで活やくする生徒も数多くいました。

越原記念館

上／越原記念館外観。　下／春子が作った名古屋帯。
学校法人越原学園（名古屋女子大学）所蔵。

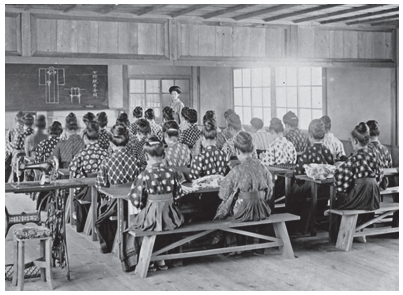
越原記念館

名古屋市瑞穂区汐路町３-40
（名古屋女子大学内）
☎052-852-1111
10:00 ～ 17:00
休 土日祝・学園休業日
無料
地下鉄桜通線「瑞穂区役所」駅下車，徒歩５分

越原記念館

越原記念館には、春子がしたためた校訓「親切」の書や、当時の運動服の資料、春子と父の手紙、春子が和に送ったはがきなどが展示されています。そこからは、春子の女子教育への情熱や、父の愛情、たがいを思い合う春子と和の姿が伝わってきます。また、春子が作った名古屋帯も期間限定ではありますが、公開されます。

名古屋で最初に生まれた、女学生の洋装の通学服（復元）も、この記念館で見ることができます。着物に比べると、そでやスカートのたけが短く、動きやす



動きやすい服装

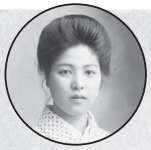
右上／学校ができたころは，生徒はかすりの着物にはかまを着て授業を受けていた。
左上／大正8年のテニスのユニフォーム（運動服）
右下／洋装の通学服（夏服）
左下／洋装の通学服（冬服）

いことがわかります。初めは、うでやあしを出す洋装の通学服を批判した人たちもいました。しかし、そんな反対意見の人たちも、やがて通学服の機能性に納得していきました。

春子が国会議員となった時の資料も保管してあります。愛知県から唯一の女性議員になった春子は、幼稚園と保育園を合わせるという「幼保一元化」を唱えていました。これは、今もなお、議論されている内容です。

名古屋女学校の現在

越原記念館は、名古屋女子大学の敷地内にあり、大学の庭には、春子と和の胸像があります。



1885（明治18）岐阜県加茂郡東白川村に生まれる。
1899（明治32）岐阜県師範学校教習所裁縫講習科入学。14才。
1900（明治33）恵那郡加子母第三小学校の教員となるが，１年で退職する。
1905（明治38）中京裁縫女学校高等師範科に入学する。翌年卒業し，同校の教員になる。
1910（明治43）いとこの和と結婚する。
1915（大正４）名古屋市東区葵町（今の東区葵）に名古屋女学校を創設。30才。このころ，名古屋帯を考案する。
1919（大正８）名古屋最初の女学生の洋装の通学服・運動服を考案する。
1924（大正13）名古屋帯が，中村呉服店で発売される。
1940（昭和15）緑ケ丘高等女学校を設置し，名誉校長になる。
1946（昭和21）戦後第１回の衆議院議員選挙で，当選する。
1948（昭和23）２つの女学校を合併し，名古屋女学院中学校・高等学校とする。中学校長になる。
1950（昭和25）名古屋女学院短期大学を設置し，学長となる。
1958（昭和33）藍綬褒章を受ける。
1959（昭和34）死去。74才。

写真提供：越原記念館（名古屋女子大学）

衆議院議員

春子が61才の時，孫の一郎と国会議事堂前で。

大学の南東には、名古屋女学校の後身である名古屋女子大学中学校・高等学校があります。記念館をおとずれた時に、散歩するのもいいですね。